

(要約版)

近世～近代前期の異類合戦物における嗜好品の受容

伊藤 慎吾 (國學院大學栃木短期大学・日本文化学科)

1. 研究目的

近世期の異類合戦物は、題材として、鳥獣虫魚・草木は言うまでもなく、食物・薬・家財道具・衣服など様々なものが見られる。その中で、〈酒と茶〉〈餅と酒〉〈精進と魚介類〉は中世以来の対立軸であり、異類合戦物を代表するものといえる。近世期は、それらをコンセプトとして、各地の酒・茶・餅(餅菓子)・料理の名が明記されるようになる。ここに、近世期の新しい嗜好品として、煙草の銘も加わり、〈酒と煙草〉という対立軸も成立する。

その中で、『酒茶論』『酒餅論』『酒飯論』など、近世前期を代表し、戦前から知られた作品については、すでいくつかの作品論が試みられているが、それは特定の作品を対象にしたものであり、全体を俯瞰すれば、まだ一部に過ぎない。とりわけ、『餅酒大合戦』『魚貝英記餅酒合戦』といったいわゆる瓦版物は幾度も改版されていながら、諸本の関係性も解明されていない。

そこで、本研究では近世の異類合戦物の特徴である身近な嗜好品が擬人化して登場する作品を取り上げる。具体的には1. 『酒煙草合戦』の基礎的研究、2. 餅酒合戦・餅合戦物の系統的研究を、それらの原本の調査を中心に行い、異類合戦物の文芸史における嗜好品の受容実態を把握する。

2. 研究方法

異類合戦物における嗜好品の受容について明らかにするためには、テキスト分析は必須である。未調査・未翻刻資料が多いために、まず伝本を調査する必要がある。そこで本研究は2つに大別される。1つは『酒煙草合戦』伝本の研究、もう1つは餅酒合戦・餅合戦の系譜の研究である。

3. 研究成果

1 『酒煙草合戦』の諸本調査

以下の4点について調べた。

- ①個人蔵 近世後期写本
- ②③たばこと塩の博物館所蔵 近世後期写本2種(当館資料集掲載)
- ④蓬左文庫所蔵『豆腐鮓酒菘蓐論貧病薬』所収「酒煙草論」

2 餅酒合戦・餅合戦物の諸本調査

餅酒合戦物、もしくは餅合戦物と一括し得る作品群については版本が散見されることもあり、これまで紹介や言及されることもあった。しかし、写本となると、ほぼ未調査のものである。そ

こで、下記の6種の原本調査を実施し、その他、関連資料を収集することにした。

- ①『〈名物名代〉餅酒騒動はなし』徳田和夫氏所蔵
- ②『下戸上戸合戦』徳田和夫氏所蔵
- ③『酒餅軍記』津市立図書館所蔵
- ④『餅酒後日太平記』上田市立図書館所蔵
- ⑤『酒と餅との水かけ論』金沢市立図書館所蔵
- ⑥『餅合戦状』徳田和夫氏所蔵

4. 考察

本研究は、近世の異類合戦物に特徴的な身近な嗜好品を対象とする作品を取り上げ、異類合戦物の文芸史における嗜好品の受容実態を把握しようとするものである。以下の2つの論点を中心に考察した。

1. 『酒煙草合戦』の基礎的研究

近世中期、各地の名物・物産品が流通するようになる中で、酒や煙草といった嗜好品もまた異類合戦物の中に擬人化キャラクターとして登場するようになった。『酒煙草合戦』はそうした文化的コンテクストを背景に成立した物語と評価できるだろう。

2. 餅酒合戦・餅合戦物の系統的研究

擬人化された餅と酒の世界観にキャラクターを共有しながら、個々の作者が新たなストーリーを創作する文化的背景を見て取ることができるだろう。

5. 結論

まず、『酒煙草合戦』の基礎的研究から見えてきたことは、都市と地方の差である。都市社会における酒と餅・菓子の受容と供給の浸透がキャラクターというかたちで作品上に現れている。これに対して地方で作られた異類合戦物には、地域的特色がキャラクターとして造形される。地方における文芸の発展に商品流通と特産品の形成といった地域文化が如実に表れているのが異類合戦物であるといえることができるだろう。

次に、餅酒合戦物の調査研究から見えてきたことは、餅と酒の合戦というコンセプトが、〈世界〉として共有された物語コンテンツとして受け入れられてきたことである。

都市の各町の名物の出現、地方の特産品形成が異類合戦物のキャラクターとしての利用に反映されていく。そして酒・餅（菓子）・煙草というそれぞれのカテゴリーの中で、特徴を生かした位置付けやキャラクタライズが行われている。擬人化キャラクターとして表象化された嗜好品は、その当時のそれぞれの嗜好品に対する消費者のイメージが表れているといえることができるだろう。